

獣医統合医療通信

副作用のない安心の動物医療を目指して

CONTENTS

生薬開発の探索 ジェナー動物クリニック（丹羽メディカル研究所所長・安心の動物医療を考える会会長）
長瀬雅之院長

INTERVIEW ブルーミントン動物病院 岩井美知子院長

症例 ネコの気管支喘息 ステロイドからの離脱

生薬開発の探索および本会報誌の目的

独自に開発された各種生薬を用いて、ヒトにおける癌、アトピー、膠原病といった難病治療に日々専念されている丹羽博士との共同研究を開始して、今年ですでに6年が経過しようとしています。この膨大な月日の大半は、イヌおよびネコにおける前記難病の治療に有効な生薬探索に費やしました。すなわち、(1) 各種化学療法剤（制癌剤・抗癌剤、ステロイド、および免疫抑制剤）の投与回数および投与量を減らす、もしくは化学療法剤の投与を必要としないで効果的に作用する生薬、および(2) 化学療法剤の投与に伴う副作用を軽減する生薬を探索の目的として、多くの臨床症例の治験を経験してきました。

ヒトに限らずイヌおよびネコにおいても、長期におよぶ難病治療では、優れた治療効果を有しながらも副作用がない生薬療法をオーナーが望まれるのは当然ですし、我々獣医師にとってもそういった生薬があるなら積極的に取り入れるでしょう。しかし、この理想を十分満たす生薬の探索は、現在においても100%成功と言える域には到達しておりません。

イヌおよびネコの難病治療における理想的な生薬療法を確立するには、まだ時間を費やさなければならないことが予想されます。そこで、これまで多くの先生方に御協力頂いた貴重な治験例を無駄にすることなく、それらを順次EBM（Evidence-Based Medicine）を意識しながら明確に報告することで、イヌおよびネコの難病治療における生薬療法の現状と問題点を検討する機会をこの会報誌に設けました。

第一回のテーマは、免疫介在性疾患における生薬療法を順次報告する予定です。本疾患における生薬療法の達成度としては、ステロイドおよび免疫抑制剤の減量、症例によっては、それら化学療法剤からの離脱が成功しています。

本会報誌により、一人でも多くの先生方が生薬療法に関心を抱き、積極的にご意見ならびにご質問を発信して頂くことで、本会が発展するよう願ってやみません。



ステロイド減薬・離脱症例①

IM-HY1とSOD顆粒によりステロイド減薬ができたネコの気管支喘息の一治験例

症例

日本猫、未去勢雄、発症時年齢10歳8ヶ月、体重4.0kg

病歴

呼吸が常に荒く、レントゲン検査にて肺炎が示唆された。抗生剤に反応が見られず、ステロイドに著効を示すが、減薬すると症状が再燃する。

プレドニゾン5mg (BID) および抗生剤の投与で来院された。

初診時身体検査所見

安静時呼吸数96回/分、強い気管支肺音を聴取、可視粘膜正常、体表リンパ節腫脹なし、その他異常所見なし

胸部レントゲン検査所見

図1・図2参照



図-1



図-2

血液検査所見

表-1および図-3参照

表-1: CBC、体重、生化学および免疫学的検査の推移

	第1病院	127病院	302病院
WBC(/ μ L)	6900	5500	6800
RBC(/ 10^4 μ L)	884	657	802
HGB(g/dL)	14.2	11.6	13.4
PCV(%)	40	34	37
PLT(// 10^4 μ L)	31.7	33.7	33.2
BW(kg)	4.00	3.88	3.16
TP(g/dL)	8.2	7.4	7.8
GPT(U/L)	*	28	38
ALP(U/L)	*	147	197
BUN(mg/dL)	*	23.3	26.4
Cre(mg/dL)	*	1.9	1.4
Glu(mg/dL)	*	128	179
RAF	320倍	640倍	320倍
ANA	陰性	*	陰性
FIP	*	400倍	*
タンパク電気泳動	図-3	図-4	図-5

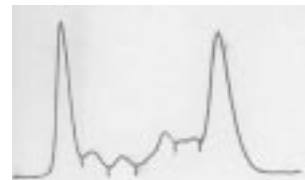


図-3

治療および臨床経過

第1～42病日

プレドニゾン5mg (SID)、TT茶0.3g/kgおよびSOD顆粒0.7g/kg (いずれも2分服)

気温・湿度により呼吸速拍および運動不耐性が出現、規定量の生薬投与が困難

第43～70病日

プレドニゾン5mg (SID)、TT茶0.3g/kg、IM-HY1を0.25g/kg およびSOD顆粒0.7g/kg (いずれも2分服) 呼吸速拍は時にみられるが、運動不耐性が改善し、性格的に穏やかになる。

第71～127病日

プレドニゾン5mg (EOD ~ 3日に1回)、TT茶0.15g/kg、IM-HY1を0.25g/kg およびSOD顆粒0.7g/kg (いずれも2分服)



図-4

interview

代替医療を加えることで 医療はもっと素晴らしくなる

ブルーミントン動物病院 岩井美知子院長先生

西洋治療だけでなく、漢方、生薬などを積極的に取り入れた代替医療をされている岩井先生。病院はすべて女性スタッフのブルーミントン。都内有数の公園、井の頭公園近くということもあり、来院される飼い主さんたちは意識の高い方が多いとか。先生が勧められる代替医療への関心、理解も高く、日々やりがいと試行錯誤の繰り返し。そんな岩井先生にお話を伺ってきました。

自身の体調不良から代替へ

代替医療をされることになったきっかけはなんだったのでしょうか？
「大学時代に実習と研究室で夜遅くまで食事しないで毎日を過ごすうち、もともと弱かった胃が悪くし、体調を崩したことから始まります。食事は少量しか食べられないですし、すぐに気持ちが悪くなりますし、肌もぼろぼろでした（笑）。これで皮膚科に行くと、解毒剤の注射とステロイドの入った軟膏が出て、それでも少しも良くなりません。それならと内科に行けば、バリウム造影と胃カメラで苦しんだ検査の診断が、軽い胃炎でした。そんな診断で出てくる薬を飲んででも少しも楽にはなりません。そのうち腰まで痛くなり、立っているのも辛く、歩けばめまいに立ちくらみ。血液検査では悪いところも出ないので、血圧が低いせいで処方された昇圧剤を飲んだら、めまいがひどくなる一方でした（笑）。この頃は、楽になる可能性のあるものならと針に整体、カイロ、マッサージなど、とにかくいろいろやりました。それらは一時的に良くなって元に戻ってしまう。これは顎関節症が根本にあるからだだと診断され、保険外の診察。とにかくお金がかかる身体です（笑）」

そこから漢方というか、代替のほうに向かったのは？

「あるときにテレビで真珠の粉でできた玉というのを紹介していて、これを入れた水を飲むと胃腸が良くなるということでさっそく購入して飲み始めたら胃が良くなってきて、これは凄いと思いました。H2（水素）を多く含む水だったということで、アルカリイオン水や還元水といわれるものと同じ効果を持つものだったんです。なので今は機械で電気分解した水を飲んでます」

それを動物医療にも？

「そうしたいのですが、動物は人のようにお水を意識して飲めない。一応ペットウォーターなるものも発売されてきていますが、効果がはっきり見えるまでにはなかなかいきませんよね。動物への代替医療への取り組みは、自分の顎関節症のときにお世話になった鍼灸の先生との出会いからで、その先生に学んで鍼灸治療を始めたわけですが、ただ、すべての子にそれを取り入れるわけにもいかず、下痢がどうにも止まらなくて弱っていく子犬のことをある先生に相談したところ漢方薬を勧めてくださって、それを飲ませたとたん子犬がみるみる元気になったことから動物にも使い始めたわけですが、いまではほとんどの症状に漢方を主にした治療を行っています。アトピーの子やワクチンアレルギーの子にも漢方を主に抗酸化作用を持つものを併用します。それによって、例えばステロイドを使用しなくて済むことも多くなります。自然治癒力を邪魔せず、身体本来の動きを助けてあげれば、強い薬で身体にダメージを与えたりしない限り、良くなっていく子がほとんどなんです。あと、活性酸素を除去するものもとても効果が出ます」



岩井先生（中央）と看護スタッフの北村さん（左）柴田さん（右）

SODを始め『IM-HY1』『冬山』はかなりの効果が

活性酸素除去ということで、獣医師用のSODを使い始められたきっかけは？

「以前から活性酸素除去効果が高いとお聞きしたので、また、大学の先輩が使われていたので試してみようと思いました。他に抗酸化作用の強いものを何種類か使っていましたから、SOD顆粒をどう使うべきかためらいましたが、腫瘍、腎機能、肝機能の落ちた子などに使い出してみると3日くらいで元気が出てくるように見えました。それからアトピーの子にも出すようになりました。付随してリンパ腫の犬に、同じ羽丹メディカル研究所の新しい生薬『IM-HY1』『冬山』も合わせて使ってみました。これはかなり効果がありました。7歳の犬なんですけど、体表リンパ節の腫大と血小板減少症（ $8000/\mu\text{L}$ ）で様々な部位から出血している状態でしたが、SODと漢方薬で治療を始め、『冬山』それから『IM-HY1』に切り換え、その後2日くらいで『IM-HY1』の『ストロング』に切り換え、この時点で症状は良くなりましたね。そのあと『IM-HY1』を『レギュラー』に戻し、漢方薬をたまに併用します。リンパ節の腫大もさっとひきましたし、血小板も正常です。この機会に言いますと、SODや『IM-HY1』がもう少し飲ませやすい剤形になってくれると嬉しいですね（笑）。犬はまだ食べてくれる子が多いですが、猫は食べてくれないですし、投薬もかなり難しいです。錠剤が無理なら鼻カテーテルを通るものなどをお願いできればとても有難く思います」

確かにそうですね。長瀬所長にしかと伝えます。最後にいま、終末医療のあり方が論議されて話題になっていますが、先生ご自身がもしもガンになられたらどのような治療を選ばれますか？もちろんガンの種類や進行度によって大きく選択肢は違うと思うのですが、

「多分、抗ガン剤などの副作用の出るものは使わないと思います。こうしていま、犬や猫の治療をしていても、やはりできるだけ長くいっしょに、元気に、おいしく、楽しく！がみんなの望みだと思うのです。私も、使った方が良く、その方が楽になると思われるときはステロイドも使います。でも、ガン細胞も普通の細胞も叩いて副作用でぼろぼろとか、自分の治そうとする力を邪魔する治療は避けたいですね。漢方は即効性がないと思っていらっしゃる方が多いのですが、症状によっては、また、上手く選択できれば驚くくらいの即効性があります。飲ませてから数分で効果が見えることだって多いんですよ。なので、成書とおりの当たり前前の西洋薬の選択をしない、それらを使わないことが本当に多くなりました。問題点というか悩みとしては、ご家族にも、また西洋医学を学んできた私自身にも迷いが生じることでしょうか。なので飼い主さんとよくお話ししながら、その子にとって最善とは何かを良く考え、ご相談して、ご家族にとっても獣医からも悔いのない治療をお勧めしていけたらと思っています。西洋医学の発展は素晴らしい面ももちろんありますが、治療に代替医療を加えることで医療はもっと素晴らしくなると思います」

ブルーミントン動物病院

東京都武蔵野市吉祥寺南町5-6-25

TEL.042-243-5275

AM9:30 ~ 12:00 PM4:00 ~ 7:00(日曜・祝日・第1水曜休診)

<http://www.petcomnet.com/bloo/>

運動後の一時的な呼吸速拍がみられる程度にまで呼吸状態は改善、安静時呼吸数30-40回/分、気管支肺胞音も軽度になる、血清タンパク分画で 分画減少

第128～226病日

プレドニゾン5mg (週に1回)、IM-HY1を0.25g/kgおよびSOD顆粒0.7g/kg (いずれも2分服)

天候(気温・湿度)により呼吸速拍および食欲低下が出現、肺音に著変なし

第227～440病日

IM-HY1を0.25g/kgおよびSOD顆粒0.7g/kg (いずれも2分服)

呼吸速拍、食欲低下、および体重減少が顕著になる、気管支肺胞音が強く聴取、血清タンパク分画で 分画上昇



図-5

第441病日～

プレドニゾン2.5mg (3日に1回)、プロニカ6mg、エバステル0.35mg/day、IM-HY1を0.25g/kgおよびSOD顆粒0.7g/kg (いずれも2分服) 経過考察中

考察

IM-HY1およびTT茶は、免疫調整作用を有することが示唆される。

SOD顆粒は、気管支喘息など大量のフリーラジカルが発生する疾患において、スカベンジャーとして有効に作用する可能性が高い。

の生薬の組み合わせは、ステロイドの投与量を大幅に減薬させることができる。

症例提供：長谷川 承先生(アルマ動物病院)

総合医療の巨頭対談

丹羽VS帯津VS長瀬

7月上旬、都内某所で統合医療の巨頭、丹羽耕三先生、帯津良一先生、そして獣医学会から長瀬雅之先生の3人が一同に会しました。互いに立場こそ違え、医学を広い範囲でとらえ、統合医療として確立させ、患者さんのために日夜努力を惜しまない姿勢に共感し、熱い会話が交わされました。(詳細をご覧になりたい方は0120-989-693日本SOD研究会にご一報ください。会談をまとめたものをさしあげます)その一部をここに紹介させていただきます。

丹羽耕三

土佐清水病院院長・SOD様作用食品の開発者
医学博士

帯津良一

帯津三敬病院名誉院長
日本ホリスティック協会会長・医学博士

長瀬雅之

ジェナー動物クリニック院長
丹羽メディカル研究所所長

長瀬「そもそもホリスティックというのは、ホメオパシーやフラワーレメディ、漢方などの生薬を使っていればすべてホリスティックというのではないし、ましてや体に優しい医療だけではない。要するにホリスティックという

のは、その人の人生すべてをも抱え支えられるかということまで入り込んで治療することなんですよ」

丹羽「そう。今、そういうのが流行りになってるけど、今の漢方のお医者さんたちのいちばん悪いところは、なんでも西洋治療はあかんというところ。ある程度副作用のない部分での検査やCTは撮るべきだし、肺炎を起こしたらやっぱり抗生物質を投与しなきゃ死んじゃう。年寄りは顕著に。漢方なんかでは絶対に効かない。ものすごく頭の範囲が狭い」

長瀬「レメディやホメオパシーなどをやっているけど、ストイックにそこに集中してしまいがちですよ」

帯津「西洋医学を拒絶しちゃうのはまズいよね。いつも私が言っているのは、西洋医学がしっかりしていないと統合医療にならないということです。癌の患者さんがいくら西洋医学以外でやるといっても、閉塞性黄疸になったり、腹水がたまったりしたら、年中針を刺して抜かなきゃなんない。これはやっぱり西洋医学でやらないと。そういう意味では最近、獣医さんは熱心ですよ。僕の講演にも全国からいらっしゃる。人間の医者はいない関東近郊か

らしか来ないんです」

丹羽「長瀬先生はよく勉強してますよね。確固たる西洋医学の知識が誰よりもありながら、副作用のない生薬の研究開発をして、さらに毎日患者さんと対峙している。オベもしてる。ぼくらなんかもうとっくにオベはしてないですからね(笑)」



写真左から 丹羽先生 長瀬先生 帯津先生

Vol.1 2007.1発行

『安心の動物医療を考える会』The society of companionate veterinary medicine

事務局 〒154-0011 東京都世田谷区上馬5-16-19 FAX 03-3414-1231 <http://www.cvm-s.org>